

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：24102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26893225

研究課題名(和文) 看護大学生4学年の自己調整学習方略の現状とメタ認知的な行動特性の分析

研究課題名(英文) Analysis of self-regulated learning strategies and metacognitive behaviors in students from four-year nursing colleges

研究代表者

菅原 啓太 (SUGAWARA, KEITA)

三重県立看護大学・看護学部・助教

研究者番号：60733615

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、看護学生の主体的な学習を支援するための手がかりを得るため、『メタ認知的方略・努力調整方略』の使用頻度を明らかにすることを目的に、看護大学生1～4年生に自記式質問紙調査を実施した。その結果、1年生は2年生より『努力調整方略』の使用頻度が高かった。また、『メタ認知的方略』の使用頻度が高い学生に半構成的面接調査を実施したところ、【学習時間の活用方法】【学習場面毎のメモの取り方】【学習への興味】の3つの意識を持って学習していることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The present study aimed to examine the frequency of metacognitive and effort management strategies used by nursing students. A self-administered survey of first- through fourth-year nursing college students was conducted to determine the keys to facilitate self-motivated learning. The results showed a higher frequency of effort management strategies employed by first year students compared to second year students. In addition, semi-structured interviews of students who frequently use metacognitive strategies indicated that these students learn with three factors in mind: the use of time spent in study, note taking according to different learning settings, and interest in learning.

研究分野：看護教育学

キーワード：看護大学生 自己調整学習方略 メタ認知

### 1. 研究開始当初の背景

昨今、急速に進展するグローバル化など社会の仕組みが大きく変容していく中で、このような時代に生き、社会貢献していくには、生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力をもった学生の育成が求められている<sup>1)</sup>。2008年から「中長期的な大学教育の在り方」について検討されており、豊かな教養と深い専門性を身につけた人材の育成と、様々な社会的課題の解決への貢献等、大学に対する期待と要請は極めて大きくかつ多様となっている<sup>2)</sup>。

欧米では、1990年代後半から「自ら学ぶ力」を理論的・実証的に解明しようとする動きから、自己調整学習(Self-Regulated Learning: SRL)の研究が行われはじめた。自己調整学習の研究では、心理的な側面がどのように影響しあって学習成果につながるのかといったプロセスやメカニズムに関する実証的な検討が進められている<sup>3)</sup>。自己調整学習を行う者は、動機づけ、学習方略、メタ認知の3要素において自分自身の学習プロセスに能動的に関与していると考えられている<sup>4)</sup>。

学習者が自己調整学習を進めていく際には、モニタリング方略やプランニング方略などのメタ認知的方略や、精緻化、リハーサル、体制化などの認知的方略といった自己調整学習方略が使用される<sup>5)</sup>。大学生を対象とした自己調整学習方略の研究では、藤田はメタ認知的方略と課題先延ばし行動との関連を検討しており、課題先延ばし行動をしないためには、努力調整・モニタリング方略やプランニング方略などの自己調整学習方略を使用することが大切であると述べている<sup>6)</sup>。また、鈴木らは、自己調整学習方略と学習状況との関連を検討しており、授業関連学習時間、予習・復習時のeラーニング利用、予習・復習の習慣性において、自己調整学習方略との関連がみられ、学習習慣を確立している学生は自己調整学習方略の使用頻度が高いことを明らかにしている<sup>7)</sup>。このように自己調整学習方略の獲得は、学習の効果を高める上でも重要な要素であり、その中でもモニタリング方略やプランニング方略などのメタ認知的方略は、学習の計画を立て、進み具合をチェックし、結果を評価するなどの学習を円滑に進める機能があるため、特に重要となる。しかし、看護大学生4学年の自己調整学習方略の使用頻度の特徴や、メタ認知的方略の使用頻度が高い学生の学習における行動特性を明らかにした研究は見当たらない。本研究において自己調整学習方略の学年による使用頻度の特徴や、メタ認知的方略の使用頻度が高い学生の学習における行動特性を明らかにすることにより、自己調整学習方略の獲得を促す教育方法を検討するための示唆を得ることができると思われる。

### 2. 研究の目的

看護大学生の自己調整学習方略(努力調整方略・メタ認知的方略・認知的方略)の使用頻度の学年による特徴を明らかにすること、及びメタ認知的方略の使用頻度が高い学生の、学習における行動特性を明らかにする。

### 3. 研究の方法

#### 1) アンケート調査

##### (1) 調査対象:

A 看護大学看護学科に在籍する1~4年生、計395名(1年生101名、2年生102名、3年生104名、4年生88名)を対象とした。

##### (2) 調査期間:平成27年7月

##### (3) 調査方法:無記名自記式質問紙調査法(留め置き法)

学年ごとに研究の趣旨及び倫理的配慮を説明した上で、調査票を配布した。回収は、強制力が働かないように回収期間を1週間設定し、所定の場所への提出を依頼した。調査票の提出をもって、研究参加の同意が得られたものと判断した。

##### (4) 調査内容:

調査項目は、学年及び自己調整学習方略尺度16項目<sup>8)</sup>である。この尺度は、努力調整方略、メタ認知的方略(モニタリング方略、プランニング方略)、認知的方略で構成されており、大学生が普段の学習で用いる自己調整学習方略の使用頻度を測定するものである。尺度の選択肢は、「全くあてはまらない(1点)」~「非常によくあてはまる(5点)」の5段階とした。

##### (5) 分析方法:

各方略(認知的方略・メタ認知的方略・認知的方略)の記述統計量を算出した。各方略得点の算出方法は、方略ごとに項目数が異なるため、項目数で割った平均値を得点とした。メタ認知的方略得点は、モニタリング方略得点とプランニング方略得点の平均点とした。また、メタ認知的方略得点が平均点より高い学生を<メタ認知高群>とし、インタビューの調査対象候補者とした。学年ごとの各方略得点の分布を確認したところ正規性が保障されなかった。そのため、学年差については、クラスカル・ウォリスのH検定を行ったのち、マン・ホイットニーのU検定(ボンフェローニ法で有意水準を調整)で多重比較を行った。

#### 2) インタビュー調査

(1) 調査対象:<メタ認知高群>の学生59名のうち、インタビュー調査の同意が

得られた5名

(2) 調査期間：平成27年8月～10月

(3) 調査方法：

<メタ認知高群>の学生の中から、インタビュー調査の協力依頼の説明を聞いてもよいという学生に対して個別にメールで連絡を行い、研究に関する説明を行う日程を調整した。改めて研究の趣旨及び倫理的配慮を口頭と文書にて説明し、同意の得られた学生を調査対象とした。インタビュー調査では、「学習における工夫している点や注意している点、学習を進めていくうえで意識している点」に関する半構成的面接を実施した。1回の面接時間は30分程度とし、プライバシーが確保できる個室で実施した。面接の内容は対象者の同意を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。

(4) 分析方法

逐語録から学習における特徴的な行動について語られた部分を抽出した。抽出したデータをコード化し、コードが示す意味の類似性や相違性を考えながらコードを整理し、サブカテゴリー、カテゴリーを生成した。

3) 倫理的配慮

研究協力に関しては本人の自由意思に基づくものとし、拒否した場合でも成績等に影響なく、いかなる不利益も生じないこと、本研究で得られたデータは、研究以外では使用しないことを口頭と文書で説明した。また、本研究は対象者の能力を査定するものではないこと、個人の結果が明らかになることはないこと、また、得られた情報を、他の教職員や学生などに伝えることはないことを口頭と文書で説明した。個人情報とデータは施錠できる場所で管理し、データは認証機能付き電子媒体で保管した。本研究は、三重県立看護大学研究倫理審査会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

1) アンケート調査

(1) 対象者の属性

回答は119名(回収率30.1%)から得られ、データに欠損値のなかった110名(1年生52名、2年生17名、3年生12名、4年生29名)を分析対象(有効回答率92.4%)とした。

(2) 自己調整学習方略の学年による使用頻度の特徴

自己調整学習方略得点の平均値±標準偏差は、努力調整方略 $3.58 \pm 0.66$ 、メタ認知的方略 $3.23 \pm 0.65$ 、認知的方略 $3.18 \pm 0.69$ であった。<メタ認知高群>

の学生は59名であり、そのうちインタビュー調査への同意が得られた学生は5名であった。

学年別にみた各方略得点の中央値を表1に示す。学年比較の結果、有意差を認めた方略は『努力調整方略』のみであり、1年生が2・4年生より高かった。

表1 自己調整学習方略得点の記述統計量

学年	n	努力調整方略	メタ認知的方略	認知的方略
		中央値	中央値	中央値
1年生	52	3.8	3.3	3.2
2年生	17	3.0*	3.1	3.0
3年生	12	3.5*	3.4	3.1
4年生	29	3.4	3.3	3.2

\*  $p < .01$  1年生 > 2年生、4年生

努力調整方略は「わからないことはすぐ友人に質問する」等の“友人への依存的援助要請”との負の相関が、教員への質問では「理解できるまで説明してもらい、答えだけでなく考え方についても教えてもらう」等の“教員への自律的援助要請”との正の相関が認められたことが先行研究で明らかにされている<sup>9)</sup>。つまり1年生は、大学での学習に慣れていない状況にありながらも、友人や教員をうまく活用しながら「苦手な科目への努力、先生のいう事を理解しようとする、学習は自分に必要だと思う」等、学習に対して努力をしているといえる。今回の調査では2～4年生の分析数が少なく、学年の特徴を反映できていない可能性も高いが、今後は調査人数を増すと共に、“学生の友人・教員の活用”という視点からも調査を進めていくことが課題となる。

2) インタビュー調査

面接時間の平均は24.6分間、最長31分間、最短21分間であった。分析の結果、13のサブカテゴリーと3つのカテゴリーが生成された。以下、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは『 』で示す。

(1) <メタ認知高群>の学生の学習における行動特性

学生は、『学習のために、空いた時間を有効活用する』や『時間の使い方を意識する』、『学習内容を忘れないようにすぐに取り組む』といったように、【学習時間の活用方法】を意識していた。メタ認知的方略の中でも、学習するための段取りや時間配分を計画するプランニング方略は“課題先延ばし”に負の影響を及ぼすことが先行研究で明らかにされている<sup>10)</sup>。つまり、彼らは、課題が出されたとしても先延ばしすることなく、自分なりに学習時間の管理を行い、計画的に学習に取り組んでいると言える。

また、『教員の話した内容が、後でイメージできるようにノートを作る』や『専門用語の具体的な例を記入する』、『講義内容で不明な点が、後からわかるようにメモする』、『講義中、講義内容で重要な点をメモする』、『調べたいことをイメージし、メモしておく』といったように、【学習場面毎のメモの取り方】を意識していた。メタ認知的方略には、「具体的にどうすればよいのか」や、「いつその方法を使えばいいのか」といった、学習内容の困難度を評価したり(モニタリング方略)、それに伴い学習方法を選択する機能(プランニング方略)がある。つまり、彼らは、学習場面に応じた、一番効果的なメモの取り方を選択し学習に取り組んでいることが推察された。さらに、『学習が楽しいと思う』や『知識が増えていくことが楽しいと考える』、『普段出てくる疑問を、講義を聞くことで解消していく』といったように、【学習への興味】を意識していた。メタ認知的方略は、「勉強内容に対する興味を高めるように工夫する」「将来に役にたつなど、勉強内容を価値づける」等の、自律的調整方略との正の相関が認められたことが先行研究で明らかにされている<sup>11)</sup>。つまり、彼らは、学習内容への動機づけを高め、主体的に学習に取り組んでいることが伺えた。

今回、<メタ認知高群>の学生は、【学習時間の活用方法】【学習への興味】【学習場面毎のメモの取り方】の3つの意識を持つという行動特性が明らかとなった。学生がこれらの意識をもつことができるような教育を行うことが、メタ認知的方略の獲得を促す手がかりとなるのではないかと考える。

#### <引用文献>

- 1) 文部科学省中央教育審議会(2012.8.9) : 未来を創出する大学教育の構築に向けて <  
http://www.mext.go.jp/b\_menu/shingi/c\_hukyo/chukyo4/siryu/\_icsFiles/afieldfile/2012/08/14/1324511\_1.pdf > .
- 2) 文部科学省中央教育審議会(2008.9.11) 中長期的な大学教育の在り方について <  
http://www.mext.go.jp/b\_menu/shingi/c\_hukyo/chukyo0/toushin/08091607.htm >
- 3) 自己調整学習研究会：自己調整学習 - 理論と実践の新たな展開 - , 北大路書房, 京都, 2012 .
- 4) 伊藤崇達：自己調整学習の成立過程 - 学習方略と動機づけの役割 - , 北大路書房, 京都, 2009 .
- 5) 伊藤崇達：自己調整学習の成立過程 - 学習方略と動機づけの役割 - , 北大路書房, 京都, 21, 2009 .
- 6) 藤田正：メタ認知的方略と学習課題先延

ばし行動の関係, 教育実践総合センター研究紀要, 19, 81-86, 2010 .

- 7) 鈴木小百合, 三宮有里, 村中陽子, 他：ブレンディッド型授業における主体的学習態度育成に関する研究 - 自己調整学習方略と自己効力感に着目して - , 日本看護科学学会誌(32), 419, 2012.
- 8) 藤田正：大学生の自己調整学習方略と学業援助要請との関係, 奈良教育大学紀要, 59(1), 47 - 54, 2010 .
- 9) 前掲載 8)
- 10) 前掲載 6)
- 11) 梅本貴豊：メタ認知的方略、動機づけ調整方略が認知的方略、学習の持続性に与える影響, 日本教育工学会論文誌, 37(1), 79 - 87, 2013 .

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

菅原 啓太 (Sugawara Keita)  
三重県立看護大学・看護学部・助教  
研究者番号：60733615

##### (2) 研究分担者

該当なし

##### (3) 連携研究者

該当なし